

水曜礼拝ダイジェスト 「人間の悲慘を知る」

ハイデルベルク信仰問答 第2 主日

関口 康

水曜礼拝で何をお話しすべきかと、あれこれ思案した結果、ハイデルベルク信仰問答を取り上げることにしました。

第一の理由は、松戸小金原教会が今年度内に3 回計画している教会勉強会の主題が「私たちの信仰 教理問答書を中心に」というものであるということです。第1 回目の勉強会では、浅野正紀兄が発題してくださいました。

しかし、教理問答の学びは、日常的に、また継続的になされるべきです。たとえばオランダの改革派教会は、毎日曜日の夕礼拝でハイデルベルク信仰問答の講解説教を行うことを、彼らの大切な伝統としています。この一冊を、1 年間で学び終え、年が変わるとまた最初から学び始めます。この繰り返しです。毎年同じことを繰り返すのはマンネリであると思われるかもしれませんが、しかし実際には、学ぶたびに新しい発見がありますし、繰り返し学ぶうちに内容をすっかり覚えてしまうでしょう。この書物には、キリスト教信仰、とくに改革派教会の教えが、きちんと書かれています。またこの書物は今日なお世界中の改革派教会で重んじられているという意味で、間違いなく国際的な価値を持っています。この基本的で国際的な信仰告白文書を繰り返し学び、私たちの血とし、肉としていく

ことによって得られるものは、非常に大きいのです。

第二の理由は、この信仰問答を、私たちは、毎日曜日の礼拝の中で告白している、ということです。しかし、現在は解説抜きで読んでいるだけです。しかしハイデルベルク信仰問答は、解説抜きで読んでいくには、内容的にやや高度すぎると感じます。オランダでは、礼拝で取り上げる場合には必ず解説を付けます。また聖書の講解の代わりにハイデルベルク信仰問答そのものの講解説教が行われます。オランダだけではありません。このような学び方は、多くの国々にある改革派教会の伝統でもあるのです。

今日は、第3 問から第5 問までを学びます。第1 問と第2 問は浅野兄が取り上げてくださいましたので、続きを見て行くことにします。

最初に確認したいことは、信仰問答の第3 問が、なぜ、私たちの「悲慘の認識」という問題を取り上げているのかということです。それは第2 問に「この唯一の慰めの中で、あなたが喜んで、生き、また死ぬことができるために、あなたはいくつのことを知らなければなりませんか」と問われ、「三つのことであります。第一に、わたしの罪と悲慘がどんなに大きなものであるかということ。第二に、わたしは、どのようにして、わたしのすべての罪と悲慘から救い出されるかということ。第三に、わたしは、どのように、この救いを神に感謝すべきかということです」と答えられていることに関係しています。

これは比較的単純なことです。私たちは自分がいかに悲惨な状態にあるかを知らなければ、その悲惨さからの救いという事柄を正しく認識することができない、ということです。

ここで「救い」の意味は、救出、解放、自由になることです。「悲惨」とは、文字通り惨めな状態、悲しむべき状態です。パウロがローマの信徒への手紙 7・24 に「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」と告白しているとおりです。わたしが今そうである、この惨めな状態から、救出され、解放され、自由な身になることが、救いなのです。

しかし、私たち人間の、どこが、どのように惨めであるというのでしょうか。パウロは、次のように書いています。「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです」(ローマ 7・18～19)。これこそが、パウロが見抜いた、私たち人間の悲惨な現実です。善を行いたいという意志はある。しかし、その意志を貫くことができないほどに、罪の力に支配されている。わたしの意志の力より、わたしを罪に誘惑する力のほうが強い、というわけです。

三日坊主は「一年の計は元旦にあり」と思い立って始めたことを、三日と続けることができません。しかし、この種の意志の弱さは、ある程度までは、訓練や努力で克服しうるので。

しかし、パウロが語る意味での意志の弱さとは、言ってみれば、完璧主義的な考え方が背景

にあるものです。第 5 問に出てくる「あなたは、これらすべてを、完全に守ることができますか」という問いに「いいえ」と答えざるをえない、この種の「完全さ」の追求です。善だけを行い、罪を犯さない。そのようなことを、私たち人間がいくら志しても無理です、という意味です。いずれにせよ、ここで要求されているのは善行の完璧さです。これは神だけが持つておられる完璧さです。この種の完璧さを、私たち人間は持つていない、と告白されているのです。

だとすれば、そんな完璧さなど初めから求めなければよいという話になるかもしれません。そうだ、ボクは神なんかじゃない。弱さや欠けを持つ人間なのだ、と。

しかし、このわたしが完璧でありたいという願いに関する問題は、私たちにとっては決して単純なことではないと思います。それどころか、人間の心を、どこまでも深く苦しめるものです。

たとえば、一つ、几帳面な人間になりたいという願いを持つことは、悪いことではないはずです。だらしなさにも、限度があるのです。

また、芸術家たちはどうでしょうか。ひとが芸術に要求することの一つは明らかに、それがいかに完璧でありうるかという点です。そして完璧さを要求するのは多くの場合、観客です。この視線から逃れることは難しいと思います。そして芸術家自身も観客も、99%の確かさでは満足できなくなる。その期待に応えようとする思いは、お世辞抜きで、真に尊いものです。

(2004年4月14日、水曜礼拝)